

変化の手順

1. 背景

2028年に商業施設としての機能を終えるアスナル金山は、これまで改札を出る一つの目的としての役割を担ってきた。人々が日常的な買い物をし、時には公園となり、またあるときはステージとなったこの場所で、今後何が出来るか。通常の複合施設が閉館する際は、店舗が一つまた一つと閉店していき、虫食い状態となった建物は非常に寂しい顔をしながら暮を閉じる。そして、次の形態へと長い期間をかけて変化する。私は閉館が決定してから次の建物が閉店するまでの期間を「敷地の空白期間」と考える。好立地で人通りが多いにも関わらず、この「敷地の空白期間」では、地図上の区画が黒塗りになっているようである。そこで、本設計ではアスナル金山の魅力、駅前であること、多目的であること、を念頭に現在から2028年までの5年間にアスナル金山が次の姿へと変化する手順を設計する。

2. 現状

現在のアスナル金山の利用目的
・買い物 ・屋外ステージ ・公園 etc.
変化の最中の金山
・市民会館の機能更新の検討
・行き場を失った旧ポストン美術館

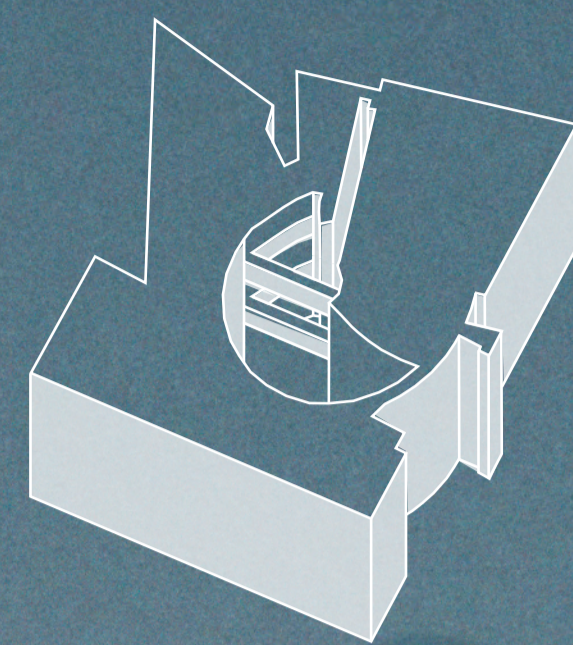


市民会館 旧ポストン美術館

金山駅周辺の建物が建っていない空地
駅周辺にも小さな建物が密集して建設され、公開空地の少なさが見て取れる。



3. 5. 手順



・閉店していく店舗に合わせて、徐々に壁を取り外し、建物を外部化（公園化）していく。あるいは一部の床を壊し吹抜けとすることで、期間限定の開放的な内部空間を作り出す。



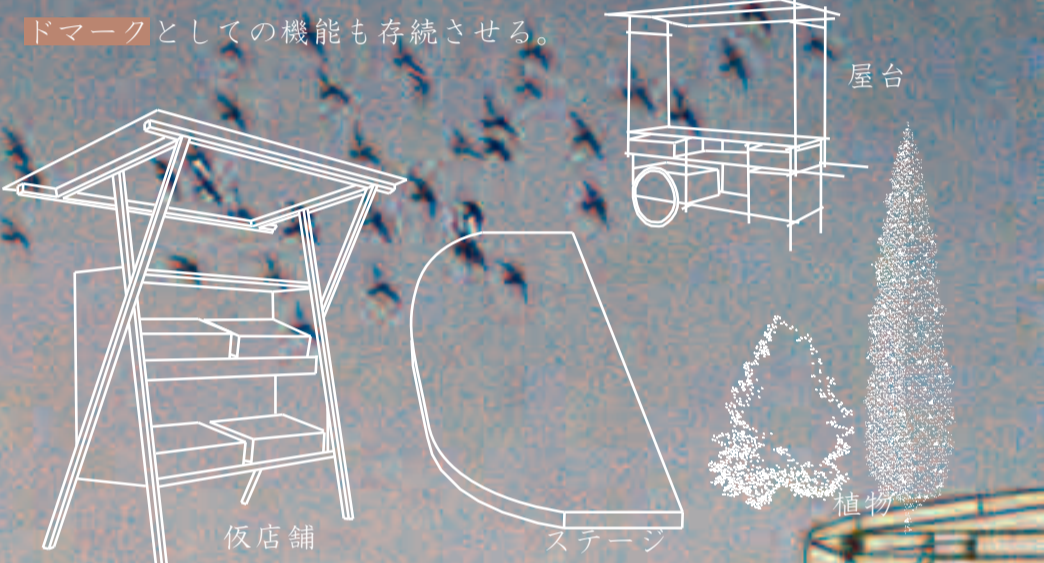
・店舗が3分の1程度閉店した時点で空間の賃貸を開始し、既存店舗と仮設店舗とが融合する施設とする。

・全ての店舗が閉店したら、躯体を残し、全ての壁を取り除き、公園化する。

3. 提案

現在のアスナル金山の最大の魅力、駅前の好立地であるということとを考慮し、アスナル金山を公共の場、すなわち公園へと変化させる。駅前に広い公共の場があることは、通常の駅ビルが所狭しと立ち並ぶ風景に比べ、駅周辺にゆとりが生まれ、建物による内部空間よりも多様な活動が誘発されると考える。さらに、駅前が公共の場となることで、本来であれば駅前に店を構えるはずの店舗が駅周辺へと広がっていき、都市の活気も駅周縁へと拡大していく。

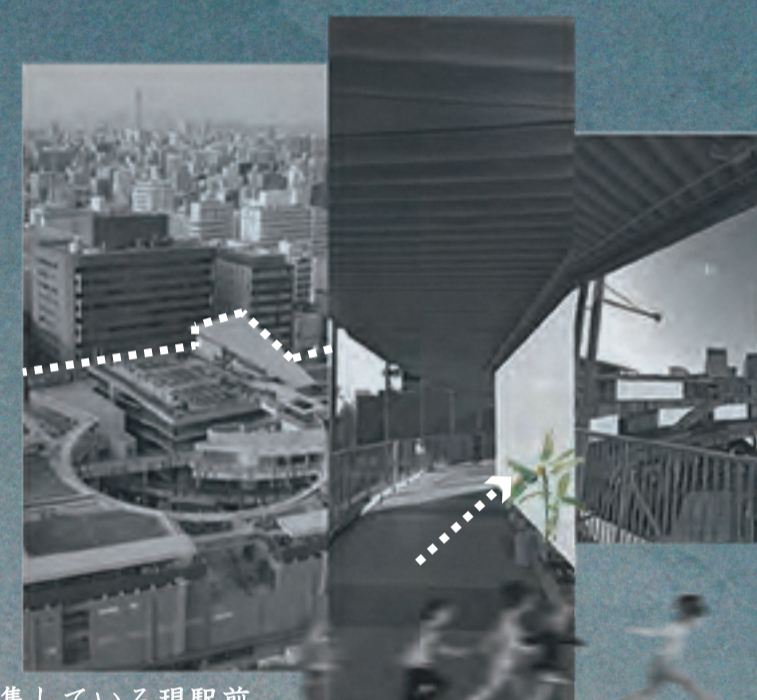
公園には一般の公園としての役割の他、一定の賃貸料を支払えば店舗やステージを設置できるしくみをつくる。さらに、現在のアスナル金山の躯体を残し、コンバージョンすることで現在のランドマークとしての機能も存続させる。



4. 2028年以降

2028年以降も公園としての機能を引き続き保持する。定期借地権契約終了後は名古屋市の施設となり、収入を目的としないまちの為の公共空間となるが、一部施設維持費は仮設店舗や臨時ステージによって賄う。同じ場所に躯体の残った公園は、店舗が入っている時と比較し、駅周辺へと見通しがさくようになり、人の居場所が可視化される。さらに、次の形態へと変化する際に躯体のみを解体するため、「敷地の空白期間」が短期間となる。

→ 2023



建物が密集している現駅前



壁を取り壊すと見通しが効く

公園となった場所がスローにもなる

残っている店舗

敷地全てが公共の場となる

→ 2028

2023

five years later...

2028